パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会　ニューズレター

太平洋の森から

2015年３月発行
No. 36

パプアニューギニア

原生林伐採操業の一時差し止め命令を勝ち取った小さな村々

勝訴を喜ぶ　ニューブリテン島　ムー村の人々

2014年度
パプアニューギニア調査・交流・支援訪問の報告

訪問日程：平良愛香、鈴木英司（11月15日から22日、１週間）
清水靖子（11月15日から12月６日、３週間）

清水靖子

〈目的〉

・原生林を守りつづけているマラクル村へのスタディー・ツアー
・不法な伐採に抵抗しているポマタ地域・ラロパル地域への連帯・支援
・ホスキンス／キンベでの調査、村々の変貌、ステティンベイ・ランバー社の現状
・首都ポートモレスビーでの調査・インタビュー

〈2014年のパプアニューギニアの経済状況〉

天然資源の外国企業による搾取と、資源輸出依存型経済、政治家・官僚・ビジネスに流れ込む富、その陰の経済的格差と環境破壊の増大、これが現在のパプアニューギニアの状況といえよう。

以前からの銅・金の採掘・輸出に加え、石油と天然ガスの採掘、森林伐採と丸太輸出、オイル・パーム・プランテーション産業が、国家財政を支えている。

消費者物価指数は、1990年を100とすると、2014年は559に上昇しており、一般の人々の暮らしは厳しく、生活困窮者が増えている。

公金の流用・汚職はとどまることを知らない。国際調査団体NGO、Transparency International PNGによると、2014年度の政治資金透明性は、調査対象の175か国中で、パプアニューギニア145番目となっている（番号の多いほど、透明度が低い）。

統計上でのGND（国民総需要）の変動率は、かつて2001年に前年比－2.46％であったものが、2007年には7.15％、2011年には10.68％、以後2012年8.09％、2013年5.53％、2014年5.84％と急上昇しつづけている。今後も急上昇が見込まれているというが、このことは庶民の経済力とは関係ないところで生じている。一方、昨今石油、銅、銀、ニッケル、コバルトなど、鉱山資源の値下がりという不安定要因がある。

※数値はIMFによる2014年10月時点の推計
※実質GDP（国内総生産）の変動を示す。
出典：IMF - World Economic Outlook Databases（2014年10月版）

こうしたなかでの森林問題はどうなのであろう。

政府は2003年以降、原生林を奪う伐採企業と手を組んで、SABL（スペシアル・アグリカルチャー・ビジネス・リース）政策を強行し、住民から99年間の土地リース権を伐採企業に与え、原生林の伐採権を発行してきた。その面積は国土の11％相当の500万ヘクタール。ほとんどが不正土地台帳と不正契約に基づく。このため地主の抵抗は大きく、各地で訴訟が起きている。

2013年の丸太輸出統計は329万7385立方メートル。前年の1.3倍となっている。

〈差し込む光〉

そうしたなかで大きな希望もまた差し込んでいる。各地の地主による抵抗と訴訟で、土地調査と契約の欺瞞が明るみに出てきたこと。裁判での勝訴が始まっていることである。

コリンウッド湾の地主たちの勝訴。さらに以下に詳細を述べるポマタ地域・ラロパル地域の地主たちが原告になった裁判で、裁判所が伐採企業への一時操業差し止めを命令下したことである。ともに「パプアの森を守る会」が支援してきた村々であり、皆さまのご支援のおかげと感謝している。

もうひとつの希望としては、原生林を有している村々への回帰である。深い森こそが食も住も水も限りなく豊かに人々に提供していることへの目覚めである。苦労は多いが、オルタナティブの収入も得られる

という実感が再認識されてきている。

11月11日～ 12日

「森林政策をめぐってSABL政策のもとで、外国企業とパプアニューギニア政府が森と土地を奪って原木を輸出した利益は１億ドルにおよぶ」と、NGOのGlobal Witnessが発表した。

これは、オーストラリアのシドニーで30か国の政府関係者による「アジア・太平洋熱帯雨林サミット」と並行して開催された熱帯雨林保護の国際NGOと市民グループの場での発表であった。

パプアニューギニアからは、ポール・パボロさんが訴えた。

「私たち森の地主は、SABLのことを知りもせず、署名もせずに、99年間に渡って森と土地を奪われてしまった。オーストラリア政府とパプアニューギニア政府は企業と組んで、私たちの森を奪って甘い利益を吸い上げているのだ」

11月14日（金）

日本出発の前日、ポール・パボロさんからメールを受け取る。

「裁判で一時操業差し止めを勝ち取りました！」という。「おめでとう！」と返信する。

「パプアの森を守る会」が支援をつづけてきた裁判で、伐採企業の操業に一時差し止め命令が下されたのだった。

ポマタ地域（ポール・パボロさんとノベルト・パメスさんが原告）とラロパル地域の地主たちが、ギルフォード社とパプアニューギニア政府の森林省を訴えてきた裁判で、巨大伐採企業リンブナン・ヒジャウ社の子会社ギルフォード社の操業の一時差し止め命令を獲得した。詳細は現地で聞いたが、西ニューブリテン州都キンベの裁判所で行われ、裁判官はエレナス・バタリ（Elenas Batari）さんであったという。今後の最終判決で操業停止への第一歩となるよう希望する。

11月15日（土）

成田発PX55便で21時5分発。

席はほぼ満席。最近の傾向として日本人客は減り、パプアニューギニア関係者が増えている。

11月16日（日）

未明に到着。アジアからの便（パプアニューギニアへのアジアからの便と客が増加中）と重なって、ビザの取得は長蛇の列また列

両替窓口でも時間がかかった。これらの結果、６時５分発のPX240ホスキンス行きのチェックインに遅れてしまった。しかも円安の結果､両替も安く､１キナ＝54.28円であった。キナ高と円安と手数料高によるトリプル・ショックである。

午後の４時便しかないが、変更に成功する。

到着したホスキンス空港では、滑走路拡大工事や、発着便の増大、乗り降りの客で賑わっていた。鉱山開発ラッシュ、伐採とオイル・パーム・プランテーションの外国資本が、この地域を変貌させつづけている。

空港を出ると、オイル・パーム・プランテーションが続き、州都キンベに入るとパーム油のタンク群、石油備蓄工場、輸出港のにぎわい、ショッピングセンターの乱立が目立つ。

ホスキンスからタラセア半島に広がる広大なオイル・パーム・プランテーション

今夜の宿泊先は、さらに先のタラセア半島にあるダイビング客用のワリンディ・リゾートである。今回の宿の予約に当たっては、ダイビング・インストラクターの置本恵子さんに多々お世話になった。

私たちの小屋は、食堂やフロントから近い立木の中にあった。埠頭にダイビング用の遊覧船の明かりが見える。食堂ではすでに人々が食事をしていて、日本人グループの姿もあった。

11月17日（月）

目的地のニューブリテン島南岸に行く交通手段として、いつものラバウル経由のTropic Air飛行便もボート便も、日程上不可能であることがわかり、日本出発

前から途方にくれていた。

そうしたなかで、思いがけずTropic Airの担当者が紹介してくれたのは、ホスキンスとラノ・ベースキャンプ往復のリンブナン・ヒジャウ社によるチャーター便への便乗であった。私たちはやむなく、それに便乗する苦渋の決断を下した。そしてこのコースが、まったく新しいスケジュールと視界を今回の旅にもたらしてくれる結果となった。

ホスキンス空港でのチェックインは10時。チケット係りのティバヤンさんに料金を支払い滑走路へ。11時発の便でラノ・ベースキャンプへ向かう。

リンブナン・ヒジャウ社のチャーター便に便乗する

チャーター機はまっしぐらラノ・ベースキャンプの方向に向かう。途中、日商岩井時代のステティンベイ・ランバー社の伐採後の二次林や植林地。オイル・パーム・プランテーションの交差する北半分、ついで原生林の山岳地帯が見える。やがて、原生林をぬう伐採道路が見え始める。大規模に開かれた港と丘一帯を飛行機は旋回すると、貯木場や諸施設、輸出港が眼下に展開する。これがラノ・ベースキャンプである。

この伐採地はポーション196と呼ばれるSABL下に入れられたラロパル地域（１万1000ヘクタール）である。

政府の土地省は、この土地を、仲介人や有力者が不正作成した土地調査報告書に基づいて99年にわたるリースを与えた（2008年）。さらに森林省は伐採権をリンブナン・ヒジャウ社に与えた（2009年）。村人への何らの説明も、村人による契約もなしに行われた。

後に訪問するポマタ地域（15000ヘクタール）も同様であった。

そして2010年、村人による激しい抵抗の中を、リンブナン・ヒジャウ社は箱船と機材を導入して強行伐採を開始した。

リンブナン・ヒジャウ社による巨大伐採拠点ラノ・ベースキャンプに到着

チャーター機の同乗者たちは、リンブナン・ヒジャウ社のボス風のマレーシア人、雇用人、フィリピン人たちだった。帰りもほぼ同じメンバーだった。

マラクル村からのマリアさんのボートの迎えが遅くなることがわかり、チケット係の配慮で、食堂に案内された。雑用と食事作りをしている女性たちが出入りしていて、聞くと近くの村から来ているという。

平良さんは、旅の目的のひとつを現地語を学ぶことにしていたので、さっそくマムシ語の勉強を開始。皆喜んで対応してくれ、大笑いの連続の楽しいひとときとなった。

「カエルのうた」の現地語も教えてもらう。

最後に彼女たちに、「伐採についてどう思っているの？」と聞くと、しっかりと小声で「多くの人々が伐採に反対している」という答えが帰ってきた。

その合間をぬって食堂から丘の建物や機材の撮影をする。

リンブナン・ヒジャウ社の子会社として、ベースキャンプで伐採・輸出を行っているギルフォード社の操業は、完全に停止しているはずであった。

しかし目の前の建築現場では、ボス用の宿舎の建設工事が行われていた。

待つこと延々、４時近くにマラクル村からのマリア

丘の上から見るラノ・ベースキャンプ

操業一時停止命令に違反して、ボス用の宿舎のセメント工事が進行中だった

さんのボートが到着。「連絡があるまで待機していて、それから出発した」とのことだった。

ムー村でこの私たちの訪問を、ずっと待ちつづけている多くの村々の人々のことを思い、残念無念でいっぱいになる。時間的に立ち寄ることはもはや不可能であった。

マラクル村からの出迎えのボート（マリアさんたち）

ボートがラノ・ベースキャンプの海岸沿いに東に進むと、過去に行われた激しい伐採現場とオイル・パーム・プランテーションが展開する。

2010年に開始された伐採から、この一時操業差し止めの状態を勝ち取るまでに、村々の原告側は３年以上も費やさざるを得なかった。政府も地元役人も裁判所でさえ応援をしてくれなかったからである。それどころか企業といっしょに警官を使って村人を脅した。それでも諦めず村人たちは道路封鎖をし、裁判で訴えつづけた。そして11月14日勝訴を得た。

しかしこの日までに、すでに海沿いと奥地に伐採が入り、丸太輸出はつづいた。あまりにも酷い日々であった。夕暮れのなかで、せめてこのまま停止をつづけてほしいと心から祈り、今後の支援を誓った。

海沿いに展開するラロパル地域の伐採跡とオイル・パーム・プランテーション

夕暮れの海を操縦するヘンリーさん

夕闇から夜にかけては、環礁に追突するのを避けるために、ボートはスピードを出さない。その間、夕闇から天空の星々が現れ、宇宙の壮大な眺めとなるひとときを、舟から味わった。

筆舌につくしがたい。歌にもならない。声にもならない。私たちの舟は、宇宙遊泳のように星の真只中を進んだ。波間を見れば、光り続ける魚の群れ、また群れ。この世の眺めとは思えない。

何十回とパプアニューギニアに来たが、この経験は初めてであり、生涯忘れることができない。永劫の宇宙からの光と霊の流れが私を包んでおり、私の中にあり、私はその恵の真只中にあった。

夜ごとに村人たちは、この不思議に生きているのか。うらやましいような、私の知らない世界に生きている人々への畏敬が私を包む。

この森と海は、宇宙と先祖の生命の遺言でもあり、私たちの世代で失ってよいものでは決してない。

マラクル村に着いたのは夜８時になっていた。崖の途中のいつもの宿舎に入る。

ポール・カテ神父お手製のソーラー機材のジェネレーターを起こすまでに時間がかかり、その間、日本から持参したソーラー・ランタン２つが活躍してくれた。ケロシンランプよりも明るい。

今回はこれに加えて、DVDを持参したのだが、ともに大いに喜ばれる。

11月18日（火）

奥地の森が見たいという平良さんは、マリアさんの甥のガブリエルさんが案内役となって朝早く出発していった。

鈴木さんと清水はマリアさんとともに近場の訪問に出かける。

まずは宿舎近くのマラクル村のオットーさんの家に行って挨拶する。育てたココア豆を乾燥させる施設を一番熱心に行ってきた人で、貯めたお金で今は小さい売店も開いていた。昔も今も伐採反対派のリーダーである。

ついで私たちは、平地の海岸沿いにケロケロナ村を目指した。竹林あり高い森あり、カヌーづくりの場あり。ケロケロナ村の首長の家に立ち寄る。彼は、この地区の行政官にして伐採派。

ここでは、オルタナティブの飲み物として清水お勧めのハイビスカス・ドリンクのデモンストレーションをする。ハイビスカスの花びらに熱湯を注ぎ、レモンと砂糖を加えると「美味しい!!」飲みものが無料でできる。村巡りのレシピで今までも何回もお披露目して

マラクル村でオットーさん一家と鈴木

ケロケロナ村でハイビスカス・ドリンクづくりのデモンストレーション　清水

鍋や皿をスシ泉の流れを利用して洗い終えた子ども

水汲み帰りの家族と平良

きた飲み物だ。

早い午後は、スシ泉へ水浴びに。泉は親子であふれていた。小さな子どもたちが食器を洗うお手伝いの真最中。何枚もの食器を泉に投げては、その流れの勢いで汚れを落としていた。終わるとそのお皿類を頭に乗せて、こともなげに帰って行った。

子どもたちの肩から胸にかけての筋肉は引き締まって発達している。丘を登り降りする手伝いは、苦しいことも多いに違いないが、母親の姿を見て、学んで行くのであろう。

11月19日（水）

午前中はエレメンタリー・スクール（４歳から６歳の子どもたちの小学校前期）に話を頼まれた。

私たちの自己紹介と「蛙のうた」の合唱で一気に盛り上がる。平良さんはリコーダーも吹かれる。子どもたちが集中してしっかりと聞く。この集中力は原生林

の村の子どもたちの特徴である。「人は見る者になる」と言われるが、その瞳が澄んでいて一途である。いつも教えられる思いで子どもたちと過ごす。

午後は、プライマリー・スクール（７歳から12歳の６年の小学校）へ話に行く。DVDの映写をする予定だったが、機械が準備不足で、浜辺での集会となる。大勢の生徒たちが集まっているのに、身じろぎもせずに私たちの話をしっかりと聞く。感動的な場面だった。私には「ヤスコはまた来年くるの？」との質問。「もちろん」と応えると拍手。

前任者の女性校長はマラクル村に伐採を入れるなという署名活動もしていたし、今の校長のピーター・リバトキアさんも、伐採会社にサインをするなと、子どもたちに教えているという。歯切れのいい気持ちのいい人だった。

学校への往復の途中で、村のクリニック前を通る。マラリアに苦しむ子どもたちを連れて、医師の到着を辛抱強く待っているお母さんたちだった。

医師のトムさん自身もマラリアに苦しんでおり、「森を守る会」は、マラクル村訪問の最初の2008年に医薬品支援をした経緯がある。薬は高価で、また現場での必要性から消耗は早い。一方で近代医学の薬に馴染むと、それに依存する身体になることへの考慮も必要である。医薬品の支援ということは難しい。

伝統の森から得られる木々の葉っぱや、幹の汁、果実は、無料で得られるだけでなく、その大地から育ま

ピーター・リバトキア校長と平良、清水

医師の到着を待つ家族（マラリアに苦しむ子どもと母親）

マラクル村のプライマリー・スクールの生徒たち

「マラクル村には絶対伐採を入れさせない！」と策を練るドナトゥスナ・モリさんとオットーさん

れた身体にもよい。私もそちらの信奉者である。

マラクル村のココア豆にも害虫が入り始めた。ラバウルから始まった虫の害。マラクル村の場合は、まだ初期だから大丈夫とのことではあるが。オルタナティブの収入の要であるので心配だ。

マラクル村の前述のオットーさんの家で、ドナトゥス・モラさんに出会う。

「マラクル地域にもやってくるかもしれない伐採の流れに、私たち反対派は、どのように抵抗するか話し合っている」と言う。「アッパー・クラン（部族の上位階級）の人々は伐採賛成が多いが、数で上回るサブ・クランの人々は伐採反対が多い。伐採派45％、反対派55％だ。万が一、彼らが伐採へ契約をしたとしても、反対する私たちの土地にブルドーザーを入れさせ策を練っている。土地の査定をしている」と話す。そうか、そういう危惧を持つところまできているのか。

遅い午後は、いよいよ待望のワラ・カラプ滝へボートで出かける。今日も豊かな水量だ。

マリアさんの姪のエレナさんと、平良さんが、水をかけあって遊んでいる。

水は甘くて美味しい。オペレーターのヘンリーさんは、この水を汲んでボートに乗せた。彼は寡黙な人で、こうしたことを黙ってやり続ける。私たちの宿舎に水を運ぶためである。

ワラ・カラプ滝

私も水の中に身体を沈めた。ほどよい冷たさで、いつまでも浸っていたい気持ちになる。“水の惑星”の何万年まえからの営みが作り出した原生林の水は、かくも心地よいものか。“誰にも教えたくない秘境”と言いながら、私も書いている。母なる宇宙の“水の惑星”の最後の奇跡として、書きまくっている。

ニューブリテン島全域の原生林そのものが、残したい最後の秘境である。でも、それが伐採企業と国家の毒牙にかかって奪われつつある。ワラ・カラプ滝は、その最後の砦の象徴でもある。

夜は、ホタルの木を見に出かける。今年は一昨年の“辻垣さんの木”にホタルが集まっていた。昨年の“大場さんの木”のホタルの光は、今年は少ししか集まっていない。状況によって光る場所を変えて呼応しあっているのだろうか。

11月20日（木）

早朝４時にボートで出発。ポマタ地域において伐採に強い反対をつづけてきたムー村のポール・パボロさんたちを訪ねる。

海から見える丘の上の伐採地とオイル・パーム・プランテーションは、目を覆いたくなるほど拡大している。

ポマタ地域（ドリナ・ベース・キャンプ）とラロパル地域（ラノ・ベースキャンプ）からの丸太輸出量の

ポマタ地域・ラロパル地域ほか

総計は2013年にパプア最大の量を示している。

2013年の一年間で21万9889立方メートルを輸出した。雨季には輸出量は減るが、乾季の12月の輸出量は１か月に42,756立方メートルとなっている。船積みを7000立方メートルとすると、１か月に６回も船が来ている。このような急激な伐採ぶりを見聞したことがない。

伐採の丘を見て、ショックを受けた平良さんたちは、「これをマラクル村の子どもたちに大きな絵にして、こんど来るときに紙芝居のように見せたらいい」というアイディアを出す。

帰国後「森を守る会」の事務局会で話しあったところ、辻垣代表が乗り気で、「やってみよう。子どもたちへの土産にもなる」と意気込んでおられた。

ポマタ地域での不法伐採跡とオイル・パーム・プランテーション

オイル・パーム・プランテーションづくりに、素足で農薬散布をさせられる労働者

首長に裁判費用の支援を渡す

このオイル・パーム・プランテーションでの農薬散布は泉を汚染しつづけ、また労働者の健康被害が顕著に出ている。労働者たちは素足で農薬散布をしている。

ムー村に到着。「17日にここに来ることができなくて本当に申しわけありませんでした」と謝る。「みんな遠くからボートで来て待っていたのだよ……」と人々は残念がる。

伐採一時差し止めの判決の詳細の聞き取りをする。

首長の顔も、ポール・パボロさんの笑顔も、村人の顔も、久しぶりにすっきりしていたのでほっとする。

ポール・パボロさん

長い抵抗の年月だった。

政府と企業と警察は一体だった。自分たちの抵抗と裁判だけが唯一の頼りだった。

その実りを味わいつつも、操業停止がほんとうに行われているか監視している。

伐採されてしまった部分は戻らない。しかし深い広大な森の奥地の伐採を食いとめることができた。

私たちは「パプアの森を守る会」からの裁判支援のお金5000キナを首長に渡し、3000キナは銀行口座に入れて今後の裁判費用に使えるようにすること、今後も支援をすることを伝えた。

昨年の撮影のDVDを土産として渡し、鈴木さんのパソコンでそれを見る。またソーラー・ランタンも土産として渡した。

帰国後のポール・パボロさんから、「12月８日のキンベでの裁判で、伐採一時差し止め命令は、そのまま延長されることとなった。人々は元のような落ち着いた村の暮らしに戻っている」との、さらなる喜びのニュースが入ってきた。

ムー村に別れを告げて、リンブナン・ヒジャウ社（子会社名がギルフォード社）の伐採拠点のドリナ・キャンプへ向かう。

キャンプでの人と機械の動きは、目立たなかったが、

ドリナ・キャンプ　丸太は積まれたままだった

操業一時停止命令にもかかわらずリンブナン・ヒジャウ社（子会社ギルフォード社）は伐採フォークリフトで丸太を移動させていた。

丸太の集積場の方に行くと、伐採フォークリフトが丸太を移動させていた。その動画を撮る。これは伐採操業差し止め判決への違反である。

遅い午後、ジャキノット湾に戻る。イルカに出会える絶好の時間帯だ。イルカたちがよく出没する場所にボートを近づけてもらう。すると「いた!!」。

今まで見たこともない大小のいっぱいのイルカたちが、私たちのボートのまわりに集まってきて、ジャンプしたり、躍り上がったり、群れ合ったり、至福のときを味あわせてくれたのだった。「ありがとうイルカさん！平良さんたちにジャンプを見せてくれたのね！」

マラクル村のジャキノット湾はイルカの聖地と私はひそかに名づけている。原生林からの滋養とマングローブ林の小島の間の安全地帯が、イルカの出没場所である。ジャキノット湾全体が淡水と海水の絶妙なバランスのユニークな湾であり、多様な海の生き物が、その懐で憩っている。

11月21日（金）

「早朝４時に海岸を出発よ」と言われて、「よし頑張るぞ」と、前夜から準備を整えていた私は一番に宿舎

を出られる状態になっていた。

マリアさんが、「じゃあヤスコと私が先に行って、ヘンリーさん（海辺で準備しているオペレーター）と交代して、彼に宿舎に荷物を取りに宿舎に来てもらうから」と手はずを伝える。

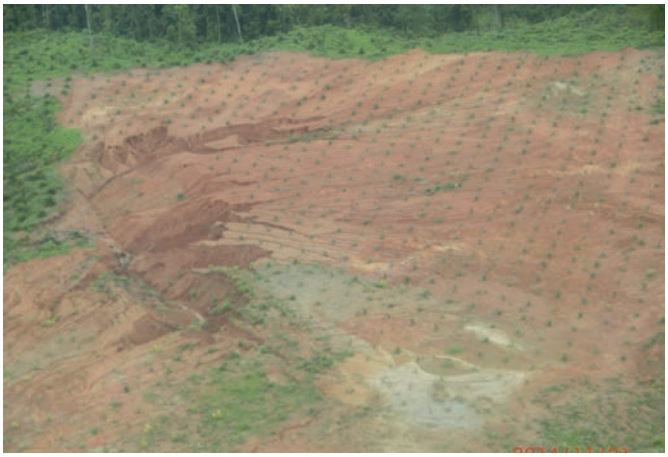
気軽に「OK ！」と言ったところまでは……無事だった。しかし、片手に懐中電灯、片手にバッグを持って真っ暗闇の急な崖を降り始めたとたん、……、足元を踏み外して、ダダ……っと、前のめりのまま崖を落下！　勢い余って２本の細い木にぶつかる。必死に木にしがみつく私。しかし勢いは止まらず、横に放り出される。身体はまったく動かなくなった。もう私は駄目か？

と、……そのとき、下の道をひとりの母親が通りかかったらしい。らしいというのは私には見えなかったが、彼女は登ってきて私をしっかりと抱き上げてくださった。彼女の力に支え上げられ、私はかろうじて道へ、そして海岸へ。

見ると彼女は左手で赤ちゃんを、右手で私を支えている。マラクル村の母はなんと強いことか。偶然降って湧いた天使のような若い母親のことを、その腕の温もりを、私は生涯忘れることはできない。私の服も身体も傷だらけとなったが、なぜか幸せな気持ちだった。

２本の木と母親と、七不思議と思える出来事だった。

「その母親は誰だったのだろう？　不思議だね。でもヤスコが落ちた崖を皆で整備したから、来年は安心して来てください」と、後に宿の持ち主のポール・カ



リンブナン・ヒジャウ社のラノ・ベースキャンプ出発後、上空から撮影した伐採地

テ神父は語る。

４時にジャキノット湾を出発し、ラノ・ベースキャンプへの遠い海路を進む。

再び、あの宇宙の星と波間の遊泳が始まる。やがて、その星々が消えゆくころ、聖書の「創世記一章」の水鳥が海の上に羽を広げて漂っている場面、生きとし生けるものを産み育む母なる神。創世のしののめが、行く手の海路に横たわる。何という不思議だろう。

私は、痛む身体をさすりながらも、感動の舟旅をつづける。

さようならマラクル村、そしてポマタ地域とラロパル地域の村々と森よ。

右手につづく、ポマタ地域とラロパル地域の丘の伐採地はあまりにも凄まじい。

母なる神、水鳥が涙を流しているにちがいない。私たち「森を守る会」は、この最後の原生林を守るために、連帯をつづけることを誓う。

ラノ・ベースキャンプに８時前に到着し、出発は９時半だった。またパイロットの隣で伐採地を撮影（前ページ写真）。かなり奥地まで伐採道路が伸びている。オイル・パーム・プランテーションのために皆伐したばかりの裸の大地もあった。

北岸に近づくと、ステティンベイ・ランバー社のユーカリ「植林」地（薄緑などですぐわかる）や、オイル・パーム・プランテーションが広がる。やがてホスキンス空港へ。

ホスキンスでは宿舎で平良さんたちといっしょに最後の夕食を過ごす。

平良さんの大らかで包み込む優しさ、鈴木さんの細やかなビジネス感覚のアドバイスと助けの数々。本当に素晴らしい仲間を得て感謝でいっぱいです。ありがとうございました。

11月22日（土）

朝食後、平良さんたちは日本へ帰国のためホスキンス空港へ。

私はキンベに残る。今回は調査に数日間の余裕ができたのでキンベでゆっくりできる。アミオからの仲間たち、ブルマ村とマタネコ集落訪問。ステティンベイ・ランバーの近況へのインタビュー。そして南岸地域支援のNGOとも会える。

宿泊については、JICAの海外青年協力隊員の加藤孝明さんの推薦により、コッテージ・ゲストハウスというところに、日本から予約しておいた。

加藤孝明さんは、パプアニューギニアでのパイロットプロジェクトに認定された「障がい者登録・啓発キャンペーンプロジェクト」の実施管理と、同プロジェクトの持続可能性を高めるための人材育成・予算確保という、先進的な仕事に取り組んでおられた。

英語だけでなく、任期を１年延長したこともありピジン語も堪能で、笑顔の爽やかな頼もしい若者であった。今後の活躍を大いに期待したい。

パウリーン（アミオ村から）と加藤孝明さん

コッテージ・ゲストハウスはキンベのショッピングセンターの西はずれにある。

キンベの中心街では、小さなビルやショッピングセンター、ロッジが増え、村々や近隣からの人々でごった返している。バス（PMB）待ちや、トラックでの鈴なり姿もあふれんばかり。

到着した日の午後、さっそくFORCERT代表のコスマス・マカメトさんが白いワゴン車で来訪された。大柄な、笑顔が人懐っこい。以前からお会いしていたかのような雰囲気の人であった。

FORCERTの事務所はタラセア半島の中央部にあ

コスマス・マカメトさん

ベルナルド・モタさん

る、元EUの敷地内にある。EUのスタッフで、「パプアの森を守る会」とは旧知のピーター・ダムさんは、コスマスさんの右腕として働いている。強力なチームワークだ！

FORCERTは、2009年からポマタ地域のSABL問題の裁判を支援してきた。メインの活動として、ニューブリテン島南岸の原生林の村々への小規模移動製材の機械と販路、エコツアーなどの支援を長年行ってきた。ACT NOW、Global Witnessなどの欧米系の森林監視NGO、弁護士たちのCELCOR、パプアニューギニアの熱帯雨林保護のネットワークのEco-Forestryとも緊密な連携関係にある。

コスマス・マカメトさんと私の会話が、私たち共通の関心のニューブリテン島南岸の原生林の村々について集中する。時間を忘れて話し合った。ポマタ地域などの裁判の今後も打ち合わせできた。今後FORCERTと「パプアの森を守る会」が組んで相互協力できるのは素晴らしい。

さっそくコスマスさんから提案があり、2015年度の「森を守る会」の旅は、彼の運転する四輪駆動のワゴン車で南岸に行き、南岸ではボートでアミオ、タボロ、ポマタ・ロパル地域を経てマラクル村に行く、支援と調査の旅をいっしょにしないかとのことであった。(帰国後「パプアの森を守る会」に報告し、実現に向かって相互のスケジュール調整を模索することになった)

11月23日（日）

ブルマ村にて。

首長であるモタ老人の死後は、息子のベルナルド・モタさんが私たちへの案内役になっている。久しぶりの再会で、彼も少しやつれて老人になったなあという印象を受ける。いつものように朴訥な口調で、ゆっくりと話すモタさん。

ブルマ村は、現在およそ2000人。ココア豆を栽培し乾燥させて収入を得ている人々（モタさんなど）や、オイル・パーム・プランテーションのブロックを持ちオイル・パームの収穫で収入を得ている人々、キンベで働いている人々などがいる。

「オイル・パーム・プランテーションのほうが、儲けがあると思っている人々もいるが、土地は痩せて駄目になっていく。他の地域からのオイル・パーム・プランテーションへの移住者とのあいだに、コミュニケーションがなく問題は頻発」と語る。

このブルマ村は、長年ステティンベイ・ランバー社（SBLC、元日商岩井の子会社、2003年からはCS Bos Internationalなどリンブナン・ヒジャウ社系が所有）の操業の拠点、丸太積出港とされてきた。SBLCの操業については以下のとおり。

「現在、ステティンベイ・ランバー社（以後SBLCと略）に雇われているブルマ村の人は７人。製材所３人。他に大工など。現在SBLCは、日商岩井時代に植えられたユーカリ植林木からの伐採と製材と輸出が中心である」

輸出は、2013年で４万立方メートルのみである（政府のティンバー・ダイジェスト2013年輸出総計による）。SBLCのユーカリ植林地の多くは政府の土地である。

SBLCが原生林を伐ってきた土地は、TRP（Timber

Rights Purchase＝植民地時代に政府が字も読めない慣習的土地所有の地主たちを強要してサインをさせて、40年間にわたっての広大な土地の森林伐採権を発行し企業に付与した方策）の土地である。しかし2009年に期限切れになったときに、南岸の村々が、TRPにノーを突き付けて離脱した。

それ以来、SBLCは北部での操業中心になった。

その北部の地主たちも、TRPからの脱却を求めてモサ地域、ブルマ村、モピリ、カルイ、ブブシ、マラリミ、ガライが裁判中であるとのことだった。

マタネコ集落のヒ素汚染された泉

モタさんといっしょにマタネコ集落に行く。ブルマ村の一角で、かつて日商岩井がSBLCの製材処理にあたってヒ素を使用し、ヒ素汚染した集落である。

泉では女たちが洗い物をしていた。「以前ほどの汚染ではないが、汚染はつづき、この水はもう飲むことはできない」とモタさん。

注：日商岩井がSBLCの製材所の防虫処理で、長年ヒ素とクロムを垂れ流し、マタネコ集落の泉も地下も汚染させた。石灰岩の地層にヒ素が染み付いているため汚染除去は難しく、汚染度も高い。日商岩井はそのまま、CS Bos International（リンブナン・ヒジャウ社傘下）にSBLCを、ヒ素汚染後に安く売却して、2003年11月22日に逃げるように去った。今からちょうど11年前のことである。「パプアの森を守る会」としては、日商岩井に対してヒ素汚染調査と汚染除去交渉を続けてきたが、2006年6月に現地法律家とマタネコ集落と「森を守る会」との話し合いで、現地側に今後を委ねた（詳細は2006年のニューズレター）。ただしキンベに来るたびに状況を聞くことにしている。

マタネコ集落では、代表フィリップ・カウトゥさん

マタネコ集落を流れるヒ素汚染された側溝

フィリップ・カウトゥさん

塀沿いに一本だけ（SBLCが配管している）水道。沈殿物があり水質が悪い

ユーカリ植林木を運ぶSBLCのトラック

が在宅だった。その後の交渉の進展について聞く。

「企業は話し合いに応じない。以前弁護を依頼した法律家も私たちから金をもらったまま、何らの働きかけをしていない。汚染除去が困難であることからか、長老たちも交渉に積極的でない」とのことであった。

日本の多国籍企業は、ヒ素汚染と伐採による破壊を残して逃げ、次の巨大なマレーシア伐採企業リンブナン・ヒジャウ社は、SBLCを汚染ゆえに安く買い取り、汚染除去は知らん顔のまま。

小さな集落はその結果を担って苦しみつづけている。

11月24日（月）

イシドル・シロンさんが午前中に来訪。アミオ村の首長イシドル・シロンの息子。私たち「森を守る会」は、アミオ村で彼の父や、アントン・ソポ首長と長年つきあってきた。TRPとSBLCのもとで、土地も森も奪われ、無念の思いで死んで行った首長たちだった。

彼は現在、西ニューブリテン州政府のPlanning Data and Information 部の役人となっている。

イシドル・シロンさんは言う。

「TRP（Timber Rights Purchase＝アミオの場合1969年来40年間にわたって広大な土地の森林伐採権を政府が発行しSBLCに付与した方策）が、私たちから土地と

イシドル・シロンさん

森を奪った。

40年間、私たちを奴隷にしてきたTRPに対し、2009年に私たち、アミオとカスカスの地主たちは、ノーを突き付けて、契約を更新させなかった。

そうして土地も私たちも自由の身となったのだ。父たちはどんなにか天国で喜んでいることか」。彼は満面の喜びで語る。

「現在アミオの人口は増えており2000人になっている。カカオ豆とコプラ販売で現金収入を得、魚や野菜も売っている。日商岩井が伐った後の二次林は樹冠が伸びてきている。

2009年にTRPの期限が切れたので、アミオやカスカスは、TRPから離脱して、自分たちの土地を取り戻した」

「どうやって、契約更新を拒否することができたのですか」と私。

「私がそのキーパーソンだった。契約更新を前にして、企業側が、政府にかわって地主たちへの再契約要求に歩き回った。大金を懐に入れてね。政府の森林省役人たちは、企業から金をもらっているから、いつも企業と一体である」

「我が家には、Active Forest Ltd（AFL）（リンブナン・ヒジャウ社のサブ・コントラクター）と、SBLCのボスが来て契約更新を要求した。その後、使いがきて、“５万キナから15万キナをあげるから、TRP更新にサインするように”と迫った。私が“ノー!!!”ときっぱり断ると二度と来なかった」

「その後の地主と政府との決定会議が重要だった。私と弁護士の尽力で、決議はTRP更新ノー！」となったのだった！

「アミオ、カスカスのTRPは終わった。政府と企業からは、さらにForest Management Areaとして提案があったが、それにもノーと言った。他の南岸地域も離脱して、現在50万ヘクタールのアニア・カピウラ地域の多くがTRPを終えた。北岸は裁判中であり、SBLCは、現在２万5000ヘクタールの政府の土地での植林木からの伐り出しをやっている。植林木からということで、最近FSC（森林認可証）を得た」

「南岸部では、フレボーンの近くのPenloloというところから小さなスケールの輸出をしているのみ」

「実は私は、2009年以前にマレーシアの伐採企業に雇われて企業の内部を知ってきた。2009年以後は政府の役人になり、アミオ村のためのTRP交渉の重要なキーパーソンになることができたのです」

彼は次のように結んだ。

「若い人々に言いたい。先祖から譲り受けた大地をどのように生かすのか。よく考えて決断してほしい」

彼の車で、キンベの政府のオフィスへ。途中偶然にも、前述の加藤孝明さんが雑踏の中を歩いておられた。

挨拶して、イシドル・シロンさんはオフィスへ。加藤さんと清水はショッピングセンターの一角で昼食をともにした。

出てきたところで、偶然アミオ村のパウリーンさんに会った。スティーブン（彼女の兄）たちの育てたカカオ豆70袋を、ガスマタ経由キンベに送り出したのだという。喜びをわかちあう。パウリーンを加藤さんに紹介する。

11月25日（火）

久しぶりで休憩の日。荷物の整理と今後の予定の準備をする。

11月26日（水）

今日は忙しい日だった。ゲストハウスの運転手のリロイさんと郵便局や銀行へ。裁判支援の3000キナをフランシス神父の口座に振り込む。

その後、カトリック教会へ行って、神父やオフィスの担当者と出会い、今後のいろいろな打ち合わせがで

きたことは有意義だった。

11月27日（木）

アミオ村の人々が泊まるというマングシン・ゲストハウスの主人Davidが、仲間２人を連れて来られる。アミオからのココア豆や魚の商いの仲間だとのこと。

ドライココア豆にすると１袋410キナ。アウイット川とワラ川の上流奥地で鉱山が試掘開始しているが、水銀の影響で川の魚が死んだりしているとのことだった。

お昼頃、FORCERTの事務所に出かける。私の撮影した映像を提供する。各地方からのスタッフとともに、今年度の振り返りと来年度のプログラムの計画中であった。

11月28日（金）

早朝ホスキンス空港へ。待合場所に興味深い団体が楽しそうに話をしていた。

破れて汚れているズック靴。よれよれの衣服。登山隊にしては登山に向かない靴と服装だ。

機内に入ってみると、その破れ靴の白人が、私の隣席になっているではいか。私は窓ぎわ。彼はその隣。私が山沿いの原生林と伐採地を撮影しようとすると、彼も手をのばして撮影。私の好奇心はムラムラと湧き上がってきた。

「森に興味がおありのようで登山ですか」

「いや生物学者です」

「何の生物の研究ですか？」

「カエルです」

「えっ、あのカエル？」

「そうですよ」彼の顔は輝いている。

「ソロモン諸島とパプアニューギニアの原生林の湿地には、世界に類をみないカエルたちがいるのです。種類も多い……ブーゲンビル島に隣接するブカ島にいるユニークなカエルは……」と言いながら、そのダラットした長〜い姿をメモ帳にさらさらと描き始めた。

何とリアルではないか。

「体長30センチ。尻尾が長いので全長70cmとなる。木に住んでEpiprmnun Piratuin（学術用語）という葉っぱを食べる。舌はピンク。類を守るために、家族が代わる代わる養育する」

彼の名はPeter Taylorさんという米国のコネティカットからの生物学者であった。同行の人たちは、ニュージーランドからの若者だという。

「カエルは宇宙の大切な生き物」

「原生林の大地が破壊されるとカエルの種類も数も激減する。カエルたちは、その土地と森がどうであるかを物語る大切なシンボルであり、象徴なのだよ。パプアニューギニアのように原生林が多いところでは、カエルの種類も、ユニークな独自の種も多い」

「でも伐採や、オイル・パーム・プランテーションで寸断されると、カエルたちも、他の生き物も、その道を越えて、隣に移動できなくなる。生存地を失う。今回はタラセア半島に残された小さい原生林地域を見てきた」

私たちの話が、以後原生林と伐採とオイル・パーム・プランテーションをめぐって熱気を帯びたのは、読者のご想像に任せる。加えて彼はカエルの話を延々とつづけ、気がつくと機体はポートモレスビー着陸に入っていた。

そうか、カエルか。沼地で研究が中心なので、彼の靴はあんなに汚れて破れていたのか！

私は科学者ではないが、森を守る旅のなかで、生物を愛するいろんな人にであってきたなと思う。パプアの豊かな湿地をめざしてロシアから日本経由で旅するシギチドリ研究の鳥博士（イギリス人）。トリバネアゲハの研究者（現地の人々やアメリカ人）、パプアの豊かな土壌のミミズ博士（日本人）、ホタル博士（日本人）。そしてカエル博士。

それぞれが得も言われずユニークな人々ばかりで、その動物の目線から語る。「人は見るものになる」と言われるが、まさに愛するその動物に、どこか似ておられるような雰囲気を漂わす方々だった。

皆に共通しているのは、パプアの原生林の豊かさと、その森を伐る伐採商人への怒りである。「伐採業者はパプアの火山の火口に投げ込まれてしまえばいい」と言ったのは鳥博士である。優しい面差しで彼がそう言ったときは、私はまだまだ自分の怒りは浅いな〜と思ったのだった。

ポートモレスビーに着いて宿舎となるOLSHのシス

ターたちの修道院に落ち着く。

その夕方、旧知のポール・バーカーさんが迎えにきて、彼のオフィスに行く。

彼は長年政府顧問などを務めた後に、独立して民間機関、National Instituteの代表として、地主・市民・NGOのネットワークの要となり、政府との集会の場、国際会議の場も設けている。

彼のオフィスの同じフロアで、遅くまで仕事をしていたのが、Peipul Maya弁護士（Business Against Corruption Alliance with Kethon Lawyers）だった。彼女はSABL問題の調査委員会の中のポマタ地域を調査した要の人物である。

ペイプル・マヤさん

その隣の一角では、政府の汚職を調査する団体NGOで、このニューズレターの冒頭で紹介したTransparency International PNGの代表のエミリー・タウレさんが残業中であった。

この３人が同じフロアにデスクを持っていて、こんなに遅くまで仕事、しかもお互いに、いっぱいのユーモアを交わしながら働いているのは、ほのぼのとした雰囲気だった。

それで３人に、「今日ね。飛行機のなかでカエル博士という人にお会いして、ポートモレスビーに着くまでずっとカエルの話を聞いていたのよ」と言うと、３人が目をまん丸にして、「知っている！」と笑い転げた。カエル博士が、この３人の友人であるとは。世の中は狭いというか、共通の目標をもつと、出会う人も重なってくる。

その後、ポール・バーカーさんと一緒に近くのレストランに夕食に行く。

奥の席で偶然３人の弁護士たちに出会う。以前森を守る弁護士たちといっしょのときに会った女性たちだ！「ヤスコよね！」と今も覚えていてくださったことに感激。

ポールさんが、「ヤスコが、今日飛行機のなかで出会ったカエルの話をしていた人……」と言うと、またまた、「わ～」という歓声が起こる。えっ！彼女たちも知っているの？

そこへ、UNDP（国連開発計画）の家族が入ってくる。ポールさんが茶目っ気たっぷりに、またまた、「今日ね……」と始めると、「やっぱり変わらないな～」との答えが返ってきた。

その彼らの反応で、皆がカエル博士の友だちであり、皆が彼のことを大好きであり、ユニークで得難い存在であることを知った。

いやあなんと今日は素敵で、不思議な出会いの日だったことか。

11月29日（土）

ポール・カテ神父は現在、首都でカトリックのラジオ放送局の代表をしている。彼の張りのある声と知恵ある話し方は、ラジオに合う。今日はその放送局へ行く。運転しながら彼は言う。「都会は僕には合わない。早くジャキノット湾に帰りたい。帰ったら“パプアの森を守る会”」のためにボートの運転をするよ」

放送局の上にスタッフ一同は寝泊りしている。運動不足を解消するための早朝の遠距離ウオーキングと、ロザリオの祈りが、大切な日課なのだそうだ。

ポール・カテ神父

夕方、宿舎であるOLSH修道院の隣にある聖ヨゼフ・インターナショナルスクールに行く。
生徒たちによる音楽劇「クリスマス」を見るためである。家族が続々と来る。

優れた作曲家・演奏家でもある音楽の先生の指導のもと、彼の作曲した歌が子どもたちにうたわれる。ミュージカルは渾身の出来栄えであった。ヨゼフになった生徒の声と仕草が初々しくて惚れ惚れした。こういう主役は内気でナイーブな生徒のほうがよいのだと、後に音楽の先生が私に語る。

11月30日（日）

マーロン・クエリナドさんが来る。去年は彼のゴゴール渓谷に行ったので、その成果のDVDを手渡す。マーロンの瞳には、いっそう渋みをおびた人生の辛苦が刻まれていた。永遠に失った森への思いから、「ゴゴール渓谷の村の絵を書き続けていきたい。それを持って日本に再度行きたい」と語る。「もちろん、ぜひ、皆待っているから」と答える。
※『日本が消したパプアニューギニアの森』および「パプアの森を守る会」のHP参照のこと。

彼は、現在の村人の収入源について、ココア豆と、ビートルナッツからの収入は相変わらずだが、思い出したように、「そうそう、米作りも始まっている」とのことだった。

マーロン・クエリナドさん

12月１日（月）

聖ヨゼフ・インターナショナルのプライマリー・スクールに、ジャキノット湾出出身の２人の先生を訪ねる。

一人はマラクル村出身のファビアン・パペンガ副校長で、まんまるの顔にいっぱいに広がる笑顔が優しい。マラクル村での私たちの世話係の、あのマリアさんの息子である。来年の清水の訪問時に学校で話をしてほしいと頼まれる。

もう一人はマンギヌナ村出身のペルペトゥア・サガプナ校長で、声のさわやかな魅力的な女性だ。マンギヌナ村には、かつて「パプアの森を守る会」のメンバーが宿泊したことがある。マンギヌナ村は伐採に反対しているので、隣接するポマタ地域からの伐採ブルドーザーが入ってこないように監視しているとのことであった。

ファビアン・パペンガさん

ペルペトゥア・サガプナさん

12月２日（火）

ポマタ地域の裁判の担当のゴマラ・ゴルア弁護士を訪ね、ナマニ法律事務所に行く。

大柄な若い弁護士で、セントラル州出身、ナマニ法律事務所に属しているとのことである。

裁判をめぐる話を交換しあう。

運転手でもあるOLSHのシスターの車が待っておられたので、彼女と事務所を出る。

ゴマラ・ゴルアさん

途中彼女の友だちの中国人の家に立ち寄る。室内には贅をつくした調度品と家具が並ぶ。窓からの見晴らしは抜群。眼下にビルと港が見える。

荒れた大地の丘のほうには貧しい家々が点在する。金持ちと貧しさの拡大するパプアニューギニアを象徴する風景であった。

ポートモレスビーの港を見下ろす丘

12月３日（水）

休憩と今までの情報の整理に当てる。

12月４日（木）

ポール・カテ神父から依頼されて、カトリック・ラジオ放送局での「森林伐採と価格移転操作とSABL」といった内容の難しいトピックのスピーチを準備する。日本語でさえ難しいのに、英語でとなるとさらに難しく悩む。

12月５日（金）

朝、ポール・カテ神父が迎えに来て、放送局に行く。今日の彼は元気がない。黄色い顔になっている。「昨日からマラリアで……熱と身体中の痛みと震えで苦しい」とのこと。そのなかを迎えに来てくださったのだ。その強い意思と約束への忠実さに、ひたすら頭が下がる。

ラジオ局では、ウボル村出身のスタッフの指導で、どうにかこうにか録音を終える。

午後、ガエ・ゴワエさんが来る。モロベ州の出身。SBLCの森林官であった時代を経て、現在はパプアニューギニア大学の講師とNGO活動をしている。

彼の話は以下であった。

「University of Technologyを卒業後、1982年にSBLCが森林官養成を行い、1983年３月からSBLCに勤めた。1984年からはSBLCの伐採と輸出のスーパーバイザーの仕事をした。年に１万立方メートルも輸出した。

また道路建設の監督もした。ちょうど、森さん、藤川さんの時代。日本企業はいつも、時間厳守を要求する。たくさんのことを学んだ。あの当時建設した道路（キンベとビアラ間）は、今もよい道路だ。

でも、1986年にSBLCを去った。理由は1985年にタラセアでのポントゥーン箱船が嵐でひっくり返って積荷の丸太が海にばらまかれた。立派なマラスなどが多かった。その丸太を輸出したものの、輸出統計に加えなかったことに、文句を言ったが、受け入れてもらえなかった。不正義と思ったので去った。製材所には行かなかったので、ヒ素の垂れ流しのことを知らなかった。

ガエ・ゴワエさん

1987年にバニモ地区での森林官になった。
1988年に商業伐採監視員としてSBLCを訪問した。った。
1999年から2006年９月まで、パプアニューギニア大学で教えた。
その後、2008年に環境保全省に勤めた。ワリイアモは最も腐敗した長官だった。
今は、大学と提携して、マングローブ林保全などのコンサルタントとしての仕事をしている。

一般に企業に伐採権を与える要となるのは、環境保全省である。環境保全省が環境面でお墨付きを与えなければ、森林省は伐採権を与えることができない。しかし環境保全省は、ワリイアモが腐敗していて、どんどん許可を与えた。森林省のカナウイ・ポウル氏は、政治的操り人形みたいなものさ」

落ち着いた静かな優しい感じの人であった。
今後もコミュニケーションを続けていくことを約束し合った。

夕方、マルティン・ポトゥカ神父が来る。大きなポリス・カーを運転していた。彼は現在ポリスたちの指導司祭なのだそうだ。

2008年以来の再会である。彼は神学生の教育、高地赴任、湾岸のベレイナ等、任地を転々としてきた。かつての大きな目は、まん丸の顔のなかに埋まってしまって、昔の面影は薄れていた。(『森と魚と激戦地』の第１章に登場した神学生で、故郷ワイド湾の素晴らしさを語った人)

マルティン・ポトゥカウさん

出身のワイド湾に帰って司牧をしたいと願っている。故郷のワイド湾のイワイはオイル・パーム・プランテーションが入って川が汚れてしまった。「僕が居たら、こうしたことを許しはしなかっただろうに」と嘆く。

12月６日（土）
ポートモレスビー発、成田へ。

今回はホスキンス経由であったために、日ごろ聞き取りできない地域の人々や、ポートモレスビーでのゆっくりした日程が取れたのでインタビュー記事が多くなった。
今回の何よりの成果は、巨大権力に抵抗して、伐採操業一時停止命令を勝ち取った村人たちに再会し、喜びと希望と連帯をともにすることができたことである。
そして同行の平良、鈴木両氏の新しい目線からの村々へのかかわりも学ぶところが多かった。

左から平良、鈴木、清水

この調査・連帯旅行を支えてくださった「パプアの森を守る会」の皆さま、多くの支援者の皆さま、本当にありがとうございました。

2014年
パプアニューギニア訪問記

平良愛香

平良愛香、鈴木英司

11月15日（土）から22日（土）にかけて、清水靖子、鈴木英司、平良愛香の３名でパプア･ニューギニアのマラクル村を訪問した。

といっても、移動に時間を費やすため、実際にマラクル村の滞在は、17日の夜遅くの到着から、21日の早朝までの３日間ちょっと。

11月18日（火）

6:00起床し、スシ（泉）に水浴びに。子どもたちと仲良くなり、メンゲン語を習い始める。

初めに教えてもらった言葉は「髪（ギリ）」。たまたま私の髪の毛が一房だけ長く伸びているので、興味を持ってもらえたらしい。

子どもたちからメンゲン語を学ぶ

そこから、蝶（ボボ）、鳥（マヌ）、トンボ（ロロミ）、豚（ギェー）、犬（ガウェイ）、カエル（ペペ）、ヤモリ（ゲコー）など、次々に言葉を教えてもらった。（英語のゲコーは、このあたりの現地語が語源）

朝食後、清水と鈴木は村を訪問。

平良は村の青年のガイドで原生林を探索した。

ガブリエルさんと奥地の森へ向かう

まだまだ生きている原生林。人間の「利益」のために、これが「お金」に替えられてしまうのはあまりにもったいないと感じながら、同時に、かなり奥深いところ（といっても森全体から見ればほんの入り口だが）までgarden（企業ではなく個人で開墾している畑）が作られているのがとても興味深かった。企業が森林伐採をするときの自然の見方と、個人や家族が食べていくために森を少し分けてもらうといった「共存」の差を強く感じる。

11月19日（水）

小学校（低学年）訪問。30名ほど子どもたちに歌で歓迎され、お返しに「カエルの歌（日本語とメンゲン語）」「月の砂漠（リコーダー伴奏）」などを歌った。メンゲン語のカエルの歌（ペペ　ポンガ）は、後に村の子どもたちの大流行となった。（ちょっとずつ変化しつつ）

午後は高学年の学校を訪問。海辺の木陰に生徒（100名ほど）が集まり、合唱で歓迎を受ける。

私たちも歌い、生徒たちからの質疑応答。「マラクルと日本の違いは？」「日本の政治状況は？」「日本に川はありますか？」。校長先生からは特に「原爆のことを何か話してください」とリクエストがあった。

平良が沖縄の海を守る闘いの話を加え「てぃんさぐぬ花」を歌った。

エレメンタリー・スクールの子どもたち

11月20日（木）

ムー村（村人をだまして伐採を始めた企業や国を相手取って裁判をし、操業一時差し止め命令を勝ち取った村々のリーダー、ポール・パボロさんたちの村）を訪問。

ムー村の人々との出会い

その後、企業が“操業一時差し止め”命令を守って本当に作業を止めているか、ドリナキャンプに確認に行く。

一応大がかりな作業は中止している模様だが、巨大な伐採フォークリフトが積み上げてある木材を移動さ

プライマリー・スクールの生徒たち

ドリナ・キャンプにて遠方が丸太集積場

せていた。

11月21日（金）

3:00起床、ラノ・ベースキャンプ経由で帰途につく。

ラノでは浜辺でマーケットが開かれている。マラクルと違って、人々の顔に輝きがない。「伐採会社が入ってお金が中心になったため、食べ物も売買しなければならず、みんな自分の利益しか考えなくなった。以前はマラクルと同じような村だったのに」と一緒に来たマラクルの青年が教えてくれた。

ラノ・ベースキャンプの朝市　村人が野菜を売りにきていた

感想：

マラクルの「貨幣経済に頼らない生活の豊かさ」を、帰りにラノに寄ったときに、そのギャップを強く感じた。

また、マラクルでの子どもたちが生き生きしている様子、駄々をこねて泣いている子どもが見あたらないことが、とても印象に残った。

しかし一方で、医療設備が整っていないことの問題や、貧富の格差がないわけではないことをも感じ取った。

また、子どもたちがきちんと「甘えられる」環境となっているのだろうか、逆に一人の人間として尊重されているだろうか、という問い、ジェンダー差別（例：動画を見せるときに、明るくて見づらいことを告げた際、「（女人禁制の）男部屋で見たらいい」と言われた。「それでは女性たちは見られないではないか」と言ったら、「どうして女性たちに見せる必要があるのか」と返ってきた。また強い男女二分法や異性愛主義の中では、性的少数者は生きづらいだろうと感じる。これはキリスト教の「悪」影響も少なからずあるのではないだろうか）、障がい者問題（村では障がい者を見かけなかった。「いないわけはないが、家の中で家族が親切に面倒を見ている」と言われた）など、「すべての人の対等な人権」という考え方は必ずしも感じられなかった。

「西洋」の「近代文明」が「人権意識」を持ち込み、同時に「経済」も持ち込んだと考えるなら、片方（前者）だけというのは難しいのだろうか、あるいは、貨幣による経済に頼らずに、しかし個々の人権意識を高めるという方法は、どのような可能性があるのだろうか、といったことを考えさせられる旅となった。

ぜひ多くの人に経験し、考える機会としてほしい、そんな旅であった。

追記：

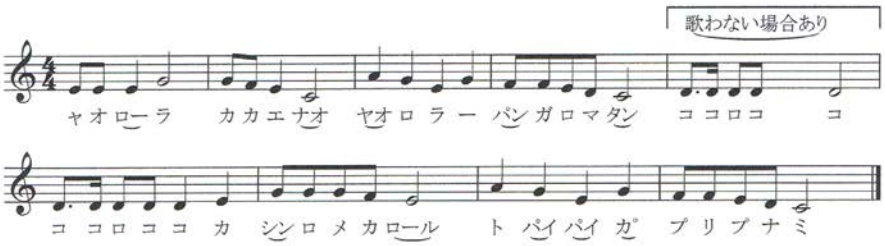
子どもたちに教えてもらったメンゲン語の歌

ヤオローラ、カカエーナオ、ヤオローラ、パンカ゜ロマタン

ココロココ、ココロココカ、シンロメカロール、トパイパイカ゜　プリプナミ。

（私は行きます、お母さんと離れて。私は行きます、学校へ。

カラスが毎朝鳴いている。椅子に座ります、バナナの下の）



職人を大切にしない日本

辻垣正彦

パプアニューギニアには、どんな村にも名職人と言える大工がいる。建築中の住まいを村々で見せていただいたが、物差しというものも使わず、見事に伝統的な家を創り上げている。

日本の大工は指矩でもって木の寸法を採り、仕口や継手を刻み組みたてる。

このところ日本では職人不足ということが言われている。東日本大震災のため、東北地方では職人不足で、人手がいくらあっても足りない。

特殊技術を持った職人たちを軽率に扱ったツケがまわってきたのである。

東京オリンピックを控え、公共工事が増えるため、政府は職人増員を叫んでいるが、１年や２年で職人というものが育つわけはない。講習会に参加して、頭の中に知識を詰め込むだけでは、職人にはなれない。

木肌の仕上がりなど見、手で触れ、鉋の歯の微妙なで具合によって、また力の入れ具合によって、出来が決まるのである。大工学校を創ったり、制度を整えるだけでは、職人は育たない。

まず職人の働きがいのある環境を整えることだ。大工である親父の背を見た息子が、跡を継ぎたいと思うような社会環境が、今の日本社会にはない。経済的安定はもちろん、社会に望まれ、希望の持てる仕事場でなければ話にならない。息子たちは目先の安心安定を求め、大手企業のサラリーマンになっているのが現実である。

職人にとって社会環境の悪化は、ここ10年顕著である。

①プレカット工法の普及と②集成材の進出。

木造住宅では昔から、大工職が無垢の赤松・檜・杉などに墨つけをし、刻んで骨格を組み上げてきた。プレカット工法は機械が自動的に継手や仕口を刻んでしまうので、大工の手が不要になってしまうのだ。

本来伝統工法ではボールドや金物を一切使わずに、木と木の仕口と継手だけで１千年以上ものあいだ、過酷な自然状況に耐える建物を創ってきたし、世界に誇る木工技術を発展させてきた。

合板や大断面集成材も、大工職を消滅させる原因のひとつと言える。

集成材は強力接着剤で造られる。無垢の木を釜ゆでにし、油脂を抜き、カスカスにしてから接着する。木独自の力ではなく、接着剤で保っているにすぎない。もはや木ではない。鋸も鉋も固い接着剤に歯がたたない。

日本では、国産材自給率が20％前後と森林国として想像できないほど低くなっている中で、製材業者がプレカット工法を推し進める原動力となっているのは、何とも悲劇的である。ほんの20年ほど前には、大工職があっての製材業であったものが、

坂本邸　桧、赤松、杉、楢など多様な国産材が人々を癒してくれる

東福寺邸　木と木の組み合わせが美しい

今では大工職を、この世から消し去る原動力となっているのだ。

東京では98％以上の在来工法の刻みがプレカット工法という機械加工に移ってしまった。ボルトや鉄板で仕口を締め付けることによって強度を保っているにすぎない。

木組みだけで１千年以上耐えている伝統工法とは、根本的に異なるものである。木と鉄とはしょせん合わないのだ。

耐久力も問題である。職人たちを滅ぼしているのは、現代の我々が職人の技を要求しないからである。原発のもたらす破壊と同じで、気づいたときには大切に育まれてきた文化を消滅させてしまうことになるだろう。

日本の森林面積は70％、その30％は人工林である。

人工林は、伐採し用材として使って始めて、生きてくる経済林なのだ。その無垢の木を刻み組み立てる大工職こそ、森を活性化させる力となる。伐ってはいけないパプアニューギニアの原生林とは、大きく異なるところである。

原生林の泉から帰る家族

原生林の泉の辺にて平良愛香

原生林の若者ガブリエルさんと鈴木英司

◎年会費・カンパ受付

郵便振替口座　東京001001-1-614216　パプアの森
2015年度（４月～３月）3000円
よろしくお願いいたします。

◎DVD　調査報告の動画　1200円（送料込み）を販売しております

ホームページ http://www.pngforest.com/

パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会
ニューズレター『太平洋の森から』第36号
発行：パプアニューギニアとソロモン諸島の森を守る会
〒141-0031 東京都品川区西五反田8-10-14-206
辻垣建築設計事務所内　電話03-3492-4245